

### 3. 「もうちょっとで」とアスペクトに関わる文の生成について: バイリンガル子弟の誤用例から

山下吉友  
オハイオ州立大学大学院

Abstract:

#### Sentence Production by Use of Mochottode with Form of Aspect

This paper investigates why bilingual children show difficulties in expressing past temporal situations in the use of Mochottode. There are constraints in the use of Mochottode in an event which is about to happen. In order to describe an event that occurs directly in front of both hearer and listener, it is possible to use the form of the present tense of the verbs without using the forms of Aspect. However, when the past event is expressed with Mochottode, either Aspect form tokoro-da-ta or yoo-to-shitci-ta is obligatory. Unfortunately, some bilingual children produce errors and make pauses in their utterances, thereby dropping the form of Aspect. I use Garrett's Hesitation Model(1982) to analyze errors to investigate sentence production. Lexical access to lexicon and sentence construction interactively with using pauses; however, more complicated processing is responsible for the errors.

#### 1. はじめに

過去のことがらを描写する際、動詞のル形をタ形に変更するだけではすまない場合がある。特に、事柄の生起する直前の状況を描写する場合、文生成においていくつかの制約が認められる。たとえば、事柄の未然態を描写するのに、「～しようとしている」、「～するところだ」のようなある一定の形式を利用するのが一般的だと言える(金田一1976、寺村1984)。ところが、発話者および聞き手の眼前に生起する事柄の描写では動詞の現在形(ル形)が使用されうるにもかかわらず、それを過去の描写にすると、その述語の現在形を過去形(タ形)にするだけでは問題をきたしてしまう。例えば、(1)aの内容を保ち、それを過去にするためには(1)bにすることはできない。「～しようとしていた」、「～するところだった」を使用した(1)c、dの文にしなければならなくなる。

- (1) a. ほら、太郎が次郎をなぐるよ。  
b. 太郎が次郎をなぐったよ。  
c. 太郎が次郎を殴ろうとしていたよ。  
d. 太郎が次郎を殴るところだったよ。

(1) aでは、話者と聞き手は事柄生起を眼前にしながら会話がなされている。この場合、話者が聞き手に事柄を「ほら」で喚起させ、注視させながら、事柄の内容を述べている。ここでは、聞き手は話者の「ほら」の喚起によって事柄の内容が把握できる状態にある。つまり、話者は場面を利用しながら、伝達をおこなっている。この場合『ほら、太郎が次郎を殴ろうとしているよ。』という形式にしなくても何ら差し支えない。むしろ「～ようとしている」形式を使用しないほうが眼前の生起する事柄のスピード感をもし出せるように思われる。ところが、(1) aを(1) bのように過去にしてみると、意味が異なっていることがわかる。殴ろうとしている直前の動作の状態を描写しているものと、その動作が生起完了したという描写とは意味が異なることはいうまでもない。つまり、(1) aの内容を保つには、(1) c,dのようにしなければならなくなる。さらに、未然態アスペクトに焦点を当て、強調する場合「もうちょっとで」「もうすこしで」のような連語的な副詞が使用される。これらの副詞が使用される場合、眼前の状況や過

去の状況にかかわらず、将然態の意味に注視し構文生成が行われる。つまり、(1) bでは「もうちょっとで」が使用不可能であり(1) c,dを使用しなければならなくなる。本小稿ではこの「もうちょっとで」が過去の描写に使用される際の伝達方法がどのようになされ、どのように文構造を認知し生成していくかをみていくものである。

## 2. テンスとフォームにおける問題

文生成の過程を見ていく前に、問題のテンスとフォームについて、論じていく。日本語において単純現在形は現在を表わすというよりも時間を越えた、いわゆる超時を表わすというのが松下(1926)のとらえ方であった。寺村(1981,1984)では、更に、動詞の現在形使用を細分化し超時、主観的な思考動詞、感覚的な動詞以外は現在形で未来のできごとを表わすことができると指摘した。しかしながら、この未来の動きに対する動詞をタ形にすると、この未来か過去かというテンスの対立以外に意味的に事柄の生起そのもの関わってきてしまう。例えば、(1) aの表現は事柄の生起の直前の状態を訴えかけるような表現のため、(1) bのようにすると過去の事柄生起の報告に変化してしまう。寺村(1984)では「ほしい」「ほしかった」の対立から意味の事柄内容の変化と形式変化について述べている。そこでは、事柄内容自体が形態の変化によって意味の素性を変更されうると述べている。金水(1989)は「ほしい」では話者の感情の直接的な表出表現でありながら、「ほしかった」にすると、感情の直接的な表出の意味が消されて、単なる報告表現になっていると言うのである。しかしながら、このことは、動詞の場合の(1)aとc、dの関係においても言える。(1)aでは、事柄の生起を聞き手に訴えかける表現で、動きの瞬時性に対する状況認知の話者の表出表現ととらえると、事柄の状況に対する話者の感情の動きの直接的な表出表現になっているともいえる。つまり、感情的な語彙以外にも、事態に対して話者の感情の動きをも含めることができる筈である。そうみていくと、「ほしい」とその表出表現を失ったタ形の表現の対立関係は共通するといえる。寺村では事柄内の感情主は話し手でなければならないとするが、事柄の推移を話し手が驚きや期待を持ちながら事柄を第三者に訴えかける場合にも、事柄に対する直接的な感情表出ができるとみることができる。さらに、先の事柄生起に関する意味の対立はアスペクトの形式を保ちながら、ル形をタ形にすることで動詞自体の意味の変化を避けることができる。つまり、動きの生起か非生起かの対立からアスペクト自体の過去か非過去かの対立に移行させることができる。この過程において、話者は出来事に対して感情を抱きながら、それを聞き手に訴えかけるという性格になっている。またこの過程において表出表現は報告、伝達の性格に変更されているわけである。この意味シフトは現在を過去の形式に変更しただけでは抑えることはできないことになる。つまり、話者の出来事に対する感情、感覚の表出表現の意味素性のみが喪失することになる。また、この意味の伝達は文生成において何らかの制約因子となることが予想される。

### 2-1 「ほら」について

動詞の単純現在の形式が将然態を表わす場合があることは、(1)aで明らかである。ここでは「ほら」が場面との依存関係にあり、聞き手にある状況を指し示す機能を持つため、聞き手は動詞の動きの意味成分のある段階の動きから将然態に至るという意味を場面から認知するといえる。しかしながら、このことは仁田(1989a)のアスペクトを持つ動詞群、いわゆる、動きの性格を持つものに限られている。つまり、ここでは事態が動詞の意味特徴に関係し、眼前の動きのある成分に焦点があったことによって意味が拡張され(山梨1995)、将然態があらわれてくるのだといえる。次の例を見られたい。

- (2) a. ほら、食べるよ。
- b. ほら、もうちょっとで、食べるよ。
- c. ほら、終わるよ。

- d. ほら、もうちょっとで、終わるよ。
- e. ほら、出来るよ。
- f. ほら、もうちょっとで、出来るよ。

(2) a. では継続的な動詞「食べる」のル形に「ほら」が使用されることによって、発話直後に動作が開始される状況にあることを述べている。さらに、(2) bでは「もうちょっとで」を使用することによって動作が行われる寸前の状態にあることを示している。(2) cの動詞「終わる」では、もうすでに行われている動きが終結することを述べ、「もうちょっとで」を使用することで特にその直前にあることを示している。(2) eでは、創造的な動作によって、産出される結果の状態への変化について述べている。その創造的な動きはすでに開始されていて、動作の動きによってそれがまさに完成する直前にあることを示している。このように動詞の動きという特徴的な意味成分が「もうちょっとで」で、その意味素性に焦点が当たることによって、その特徴に至るまでの推移状態が描かれることになる。

それだけではない。「ほら」を使用することによって、寺村のいう事柄に対する話者の一時的な気の動きに相当する、事態に対する驚きや期待のような意味が伴ってくる。つまり、動詞の基本的な意味成分以外にこのような話者の感情、感覚の直接的な表出性という意味素性が現われてくることになるといえる。したがって、「ほら」が単なる場面と聞き手を結合関係に導くだけでなく、動きの状態、動きの過程もしくは状態性を察してできる、いわゆる話者の感覚や感情の訴えの直接的な表出表現と見ることができるわけである。また、「ほら」は話者と聞き手の眼前の状態や生起に関するものであれば、過去の出来事であっても使用できる。

- (1') a. ほら、太郎が次郎を殴るよ。
- b. ?? ほら、太郎が次郎を殴ったよ。
- c.\* ほら、太郎が次郎を殴ろうとしていたよ。
- d.\* ほら、太郎が次郎を殴るところだったよ。
- e. ほら、君、少し動いたよ。(仁田1989, p.45)

(1') b) に関しては、反復相の一回の動作に視点を当てたと見ると非文ではない可能性があるが、単なる非眼前の過去の事柄に関しては「ほら」は使えない。また、この「ほら」は聞き手と話者との眼前に生起する事柄を伝えるという機能を持つもので、いわば、情報を直接的に伝達できると同時に、聞き手は言語と場面とで情報を共有できる状況にあるものと見ることができる。このことは、過去の出来事であったとしても、ビデオなどを聞き手と見ながら話す場合は可能となる。また、過去の出来事においても、聞き手の共有情報であったとしても眼前に証拠がなければ、「ほら」は使用できない。また、一方的な話者の情報を伝える場合にも使用できない。しかし、(1')eでは「聞き手にとって自覚的な過去の出来事」(仁田、1989b)として、少し前の出来事を述べる場合には使用できる。これらの「ほら」の特徴を利用して、話者と聞き手の眼前事柄情報を一方的な話者のみの情報源の伝達という設定に置き換えることで、現在の事柄の起りうる直前の眼前の出来事の様子と過去の出来事の描写の表現を対比させることが可能となり、誤用を利用して発話過程を観察することができる。つまり、情報共有から情報提供、つまり、述べ立ての表現(仁田1989a,1989b, 増岡1991)や報告文にするようなプロセスで文が生成されるかが、ここでの焦点となる。

## 2-2. 意味情報の相違

(1) aを報告文にすると、(1) c&dのような形式にする必要が出てくることは前述した。また、(1) c&d、(3) a&bのように「ほら」が使用されない場合、現在、過去、および話者と聞き手の眼前の情報共有状態の有無に関係なく使用できる。

- (1) c. 太郎が次郎を殴ろうとしていたよ。  
d. 太郎が次郎を殴るところだったよ。
- (3) a. 太郎が次郎を殴ろうとしているよ。  
b. 太郎が次郎を殴るところだよ。

また、(4) aと(4) bでは事柄の生起事態に関わり、将然態アスペクトの過去、非過去の対立というわけではない。

- (4) a. 太郎が次郎を殴ったよ。  
b. ほら、太郎が次郎を殴るよ。

動作が行われるか否かという別の次元の対立を示しているからである。これを避けるためには(1) c&dのように「ところだ」、「ようとしている」のようなアスペクト形式を保つ必要が出てくる。また、さらに、動きの生起する直前の状態に焦点を置く「もうちょっとで」を使用すると、アスペクトの形式は不可欠となる。このことを念頭に置きながら、「もうちょっとで」を見ていくことにする。

## 3. 副詞「もうちょっとで」

副詞「もうちょっとで」の使用を見てみると、「もう」、「ちょっと」、「で」の個別用法としての集合体と見られ、これまで「もうちょっとで」を一語として扱う見方はほとんどなされていない。「ちょっと」は量、空間の増減の程度を示す程度副詞に入れられる。また、「もう」は程度副詞の強調の意味で、状態の程度を修飾していると見ることができる。「で」は限定の助詞とされるものである。それぞれの用法の説明がなされてはいるが、一語としてはほとんど扱われていない。

- (5) a. もうちょっとで {ぶつかる/殴る/落ちる/死ぬ} ところだった。  
b. ちょっと {ぶつかる/殴る/落ちる} ところだった。  
c. \*ちょっとで {ぶつかる/殴る/落ちる/死ぬ} ところだった。
- (6) a. 五分で {ぶつかる/殴る/落ちる/死ぬ/食べる} ところだった。  
b. もう五分で {ぶつかる/?殴る/落ちる/死ぬ/?食べる} ところだった。

(5)aでは動作が移行し事柄の生起する直前の状態にあることに焦点が当てられている。(5)bの「ちょっと」は事柄の動きの量的な程度や動詞の意味が伴う主体の量的な要素に向けられていて、動作の直前の状態にはなんら関与していない。(5)cのように限定の助詞「で」が下接した場合、非文となる。(6)aのように「ちょっと」を時間の「5分」に置き換えてみると、動詞の意味成分である瞬間性の動詞「ぶつかる」「なぐる」などは事柄の生起までの時間的幅が示されるといい。しかし、継続的な動詞「食べる」などは動作の開始から終わるまでの使用期間が示されてしまうことになり、将然態アスペクトには何ら関与はしていない。「もうちょっとで」とは意味を異にしていることがわかる。(6)bでは動きにかかる時間の短さを示している。動きの始まりまたは、動きの完了までの時間で、動詞の意味成分に左右される。更

に、(7)aをみると、空間的な語の程度を限定する際には、動き自体の成分に関与するのではなく、空間的な幅に係っている。(7) bのように更に、その程度性を更に限定する副詞「もう」をつけてみても、空間的な量的な程度しか修飾していないことがわかる。しかし、(7) cのように「もうちょっとで」を使用してみると非文となる。

- (7) a. ちよつと右に寄ってください。
- b. もうちよつと右に寄ってください。
- c. \*もうちよつとで右に寄ってください。
- d. もうちよつとで右に寄るよ。

しかし、(7)dをみると、動きの推移を意識しながら、将に動きが開始される様な状態を示していることがわかる。このように見てくると「もうちよつとで」がばらばらの意味用法を結合させた用法というよりは、一語の役割をした別の意味の語として考えていく必要があると思われる。また、「もうちよつとで」は動きのある状態に移行する直前であることを示すもので、描写表現には使用されても、依頼表現には使用されない。

更に、(8) のように「ところだ」「しようとしている」を利用した文においても「もうちよつと」、「もうちよつとで」とでは意味を異にしていることがわかる。

- (8) a. もうちよつと食べるころだった。
- b. もうちよつとで食べるころだった。
- c. もうちよつと、食べようとしていた。

このようにみえてくると、「もうちよつとで」は、独立した単位として扱われる必要があるはずである。またこの副詞は未然態アスペクトにかかわることから、仁田(1983)の示す副詞の動詞成分に係る一類のアスペクトの層に関わる副詞群の一つといえる。そこで、この副詞とアスペクトの共起関係の問題点を実際の発話から見えていくことにする。

#### 4. 実際の発話に現われた誤用例

実際の発話の中でこの「もうちよつとで」が現われる際、アスペクト形式の生成に問題をきたすバイリンガル子弟の発話が目立つ。これらの例は意味の伝達における文生成のプロセスと制約因子を予想させてくれる。以下日本語を第一言語とするバイリンガル子弟の誤用例を分析していく。発話資料はオハイオ州にあるコロンバス補習校に通う生徒の発話である。記述に際し、...は約1秒のポーズ、..は0.5秒のポーズを示し、最終語尾の母音の引き伸ばしは例えば/e/であれば、/e:/のように示した。/e:/は約半秒の/e/の引き伸ばしを意味している。

- (9) あだね... 先生..このあいだね....、うちの犬がね...、もうちよつとでね....、兎を食べ/e/.....  
      食べ..たよ。

(9)の話者は三歳の時に来米し、現地の小学校に通いながら、土曜日は日本語の補習校三年生として学習しているバイリンガルの子供である。

- (10) M: きのうね...、犬がね...、アヒルをね..、追っかけてね...、そいでね...、もうちよつとで食べ...

食べ/e/...うん/n/...食べたの。

Y: じゃ、そのアヒル死んだの。

M: ううん、逃げたよ。

(10) Mは一歳の時に来米し現地の小学校に通っている補習校六年生のバイリンガルの子供である。この子も(9)と同じように「食べ」を繰り返している。この子の場合は母音/e/の引き伸ばしはあまり感じさせていない。ただし、二度目の「食べ」のあと、「うん」と言いながら、ポーズを置いている。

更に次の例では「もうちょっとで」の後に躊躇性が現われ、動詞の語幹の繰り返しは行われていない。

(11) A: 犬がね、となりの猫と けんかしてね、もうちょっとで/e/... かんじゃったよ。

Y: じゃ猫はけがをして血が出たでしょ。

A: ううん...、血は出なかったよ。もうちょっとで/e/...猫...かんだの。

(11) Aの発話者は一歳児の時に来米し現地の学校に通う補習校中学二年生の生徒である。この場合はタ形の前には何ら躊躇性はあらわれていない。「もうちょっとで」のあとに間隔があいている。これを見ると事柄の内容を伝達する際の形式の決定に躊躇している様に思われる。つまり、「もうちょっとで」ではことがら「猫がkam-」の意味の伝達を行うための形式の検索過程が必要からのかもしれない。または、「もうちょっとで」を使用することで焦点を当てたアスペクトの事柄の意味の調整を行ってのものとも考えられる。次の例はさらに(9)、(10)の要素と(11)の事柄以前の躊躇性を合わせた形で現われている。

(12) A: おめえが おれのかばん かくしちゃったじゃんか。

B: おれそんなことしてねえよ。まだ、かくしてねえもん。ただ持っていただけじゃん。

A: でも、もうちょっとで... かくし...し...、かくし...ちゃったじゃん。

(12) Aの発話者は三歳の時に渡米した補習校中学二年生のバイリンガルの子供である。この子の場合は「もうちょっとで」のあとに間隔があき、動詞が繰り返されている。初めの動詞の語幹「かくし-」のあとに間隔があいている。つまり、事柄内容の出来事を話者がアスペクトに焦点を当てる態度をとり、一旦記憶に留めているので、事柄の前で躊躇するものと思われる、また、途中の動詞の形式決定の際に複雑性からか繰り返しと躊躇性がおこっている。

(13) Y: テスト出来た?

S: 思い出せなかったけど..ね、一つね、もうちょっとで/e/...ましがえた。

Y: 正しい答え思い出したの?

S: うん、すぐ消してね。書き直した。

この発話者Sは一歳の時に来米し、現地の学校に通っている補習校中学一年生のバイリンガルの子である。

(14) T: 先生...おれ今日..やばかったすよ

Y: どうして?

T: さっきね... スケボー (スケートボード) やってたらね...、もうちょっとで...木にぶつかっちゃった。

Y: ちょっと..それ..どうということ? 本当にぶつかったの?

T: うん、もうちょっとで..ね。

この(14)の発話者Tも一歳のときに渡米し現地校に通っている補習校六年生の生徒である。これも(12)と同じ様な例である。さて、以上の例の共通性をまとめてみると、次のように言える。

- (15) ア、「もうちょっとで」の後に躊躇性が現われる。  
イ、動詞の語幹の後に躊躇性が現われる。  
ウ、動詞の語幹が繰り返され、次の形式までに時間がかかる。  
エ、「もうちょっとで」の後に躊躇性が現われるとともに、語幹の後に躊躇があらわれる。  
オ、「もうちょっとで」の後に躊躇性が現われるとともに、語幹の後には躊躇性は現われない。  
カ、動詞の語幹と「タ」との間に躊躇が現われる。

## 5. プロダクションのプロセス

以上の誤用例で一貫したポーズの置かれ方を分析しながら、発話者がどのようなプロセスを行っているのか、先行研究を見ながら、論じていくことにする。

### 5-1. Garretの躊躇性モデルとプロダクションモデル

Garret (1982,1990) は文の産出過程で躊躇性が現われ、どのようなプロセスを通して文が産出されるのかの情報を提供してくれるとしている。そこで、そのポーズが長ければ長いほど長い語や句が流暢に産出できるとした。また、どのようなポーズが出現するかも説明している。

文を発する場合、ある事象を把握する段階から、語彙選択、そしてその形式を整えて、文を形作っていく。その際、一旦記憶に入れられた語彙 (lexicon) をその意味と関係させるときに起る躊躇、その語彙と他の語彙が作る句構造内の調整の際におこるポーズ、これらは事柄の概念を言語化する上で最初に起動するメンタルな動きの過程である。ここではどのような語彙、句構造が必要なのか列挙する段階で、事柄の情報を認知し概念化していくレベルとしている。また、さらに列挙された語や句は次の段階でlexiconの中からどのような適切なフォームが必要なのかを決定し、句構造の中に適切な形でスロットできるように調整する時、ポーズがおこるとした。また、句構造をハイアラキカルに構成しながら、統語構造を完成させるための変換調整の際にも躊躇として現われるとした。このプロセスが行われる段階を、ファンクショナルレベルとしている。更に発話状態いわゆる完成された音声化の段階をポジショナルレベルとしている。これらメッセージレベル、ファンクショナルレベル、ポジショナルレベルは順に働き、一方向の流れで、発話の段階までのプロセスができるとした。これは、つまり、シリアルに流れる直線上のプロセスがおこなわれ、誤用はその流れに沿ってできあがり、ポジショナルレベルからメッセージレベルを認知するような逆行したプロセスが原因となることはないとしている。

発話上の生成の制約から起る躊躇性は、どのようなプロセスが行われているのかの基本的な資料となるという考えを利用して、「もうちょっとで」が使用される発話の誤用を分析していくことにする。

### 5-2. Dellのプロダクションモデル

Dell (1986) では、メッセージレベル、ファンクショナルレベル、ポジショナルレベルの考えはGarretのプロダクションモデルと類似はしているが、Garretのシリアルなタイプと違って、マルチプルタイプの

モデルである。つまり、語彙選択の段階、語彙のフォームの調整段階の各々の段階は意味の認識とそれぞれ相互活性をおこない関連づけられて語彙のフォームが文の中で決定されたり、統語の認知の段階で、意味と語形などと関連づけられて決定されていくとする。また、発話レベルで決定された音は語彙決定や意味と関連してフォームの決定にも影響するとした。つまり、Garretでは可能とされなかったが、概念把握の際の語彙の列挙段階であるメッセージレベルでの概念的意味が直接統語調節の段階（ファンクショナルレベル）にも関わることもできるとした。また、ファンクショナルレベルでの統語自体がメッセージレベルでのレキシカルアクセスに関連することも可能になるとした。このことは、発話される音の発声段階で形式を調整したり、次の語彙選択と統語形式を認知する活性作用が相互に行われるとした。このことは、Garretの様にポジショナルレベルの完成された段階まで到達しなければ発話されないというのではない。誤用を見る際には必ずしも、原因がGarretのように一方的な流れをとるという理由から、誤りはその段階以前にあるとはみていない。さて、これらの文生成のモデルと躊躇性のモデルを借りながら、日本語の構造をみていく。

## 6. 文構造を支える基本の流れ

仁田 (1983) 益岡 (1991) では、文の構造を核になる層（動詞の格に支配される構造）、ヴォイス、アスペクトの層、テンス、モダリティーの層というように構造をしめている。この構造は澤田 (1993) の主文にアスペクト、みとめかた、助動詞、終助詞を句構造外においた重層的な統語処理の助動詞の位置説明に類似するが、更に仁田 (1983) では、核要素としての事柄に続く重層的な統語形式と副詞の関係を示そうとした点に特徴がある。このことは「もうちょっとで」を検討していく上で重要な視点を提供してくれている。仁田、増岡の基本構造を示すと次のようになる。

### (16) (動詞の語幹を含む文の核要素)+ヴォイス+アスペクト + テンス+モダリティー

「もうちょっとで」は、この図でいうと核要素内の事態を話者がどのように見ているかにあたるアスペクトに関係する。この文構造から、核の層に関わる副詞は渡辺 (1981) のいうように意味の増減に関係することができるが、それ以外に係わる副詞はそれぞれの層の意味に関係してくる。この基本構造から、「もうちょっとで」はアスペクトの層に関わり、核要素の内容を保ちながら、それぞれの層につながる要素、たとえば、みとめかたやモダリティーの形式との結び付きに関係してくる。このことは各々の層の意味をその構造の形式に調整を加えていくことになる。また、アスペクトの意味とそのあとに続く態度を表わすための意味と形式の結合がはかれている。つまり、それぞれの層の意味と形式が関係する。意味と形式の制約はGleitman (1994)、Pinker (1987) が形態素の意味と形式の制約を述べているが (16) から来るような核要素に続く特殊な言語については述べていない。これは日本語の動詞がヴォイス、アスペクト、みとめかた、助動詞、モダリティーが動詞の形態素として下接するからで、英語のように別々の語意の集合からなるのではないからにはほかならない。

また、(16) では、構造と意味機能が、同時に表わされていると言える。発話において (16) は、メンタルな内的プロセスからみると、意味と概念的な過程、そして、構造的な過程の二つの見方ができると思われる。意味と概念的なレベルのプロセスというのは、事柄を言語化する以前の段階から、語彙選択に必要な意味、語彙選択、そして、概略的な文構造とその内部で使われる語彙の選択までのプロセスだ。これは先のGarretのメッセージレベルであるが、その上に、その段階からファンクショナルレベルでの語のそれぞれの意味とそれぞれの動詞の意味とアスペクト、モダリティーといった概念的な文の意味の構成段階までのプロセスを意味する。



一方、構造的なプロセスというのは、漠然とした内容把握の段階で起る語彙選択、確かなレキシカルアクセスと語彙の選択決定、(メッセージレベル)語彙の形態決定、句構造内での形態調整および統語調整(ファンクショナルレベル)、そして統語完成状態のポジショナルレベルまでの流れに相当する。

以上の二つの流れが統一体となって(16)が構成されると見るわけである。さて、この二つの意味からの流れと構造的な流れは相互に活性関連しながら文産出がなされるという立場をここではとっていく。つまり、躊躇性は、意味と語彙選択の過程、形式そして統語形式と意味の過程、またその語彙形式への移行段階で現われる。それ以外にも、音声上の問題等はあるが、本小稿では、意味と形式の関係から生ずる躊躇を中心に見ていく。それでは、「もうちょっとで」の使用される、「ようとしている」と「ところだ」形式を順に検討していくことにする。

#### 6-1 「ようとしている」形式をとる場合

例えば、仁田(1989)、増岡(1991)に従えば、(17) aは、(17) bのように表わすことができるはずである。

- (17) a. もうちょっとで食べようとしている。  
b. [4 [3 もうちょっとで [2 [1 食べ ] よう 2] としてい 3] る 4]

事柄の核要素である「たべー」は[-よう]と結び付き意思の形をとっている。また、この動詞が意思性のために、当然[-ようとしてい-]のアスペクト形をとっている。つまり、[-よう]は核要素たる動詞の意味制約と活用タイプの制約を受けながら、アスペクト形式の[-ようとしてい-]を形作っている。

意味の制約というのは、無意思動詞、かどうかということである。この無意思動詞は意思を表わす動詞と違って、(18) a.bのように / -oo /、 / -yoo / の形態はとることができず、「V-そうだ」の形式をとり、真性モダリティーの形式をとるか、もしくは、(19)aのように「ところだ」形式にしなければならない。(19)bでは現在の眼前の未然態を「ところだ」であらわすと不自然である。これも「落ちそうだ」のような真性モダリティーの形式を要求する。

また、活用タイプの制約というのは、五段動詞であれば、 / -oo / の形、一段動詞であれば、 / -yoo / の形式をとるという具合である。又、「V-ようとしてい-」は過去の事柄について述べるので、「一た」が下接する。

- (18) a. \*もうちょっとで 荷物が棚から落ちようとしていた。  
b. \*もうちょっとで空が曇ろうとした。  
c. もうちょっとで、食べようとした。(一段活用動詞)  
d. もうちょっとで、飲もうとした。(五段活用動詞)  
(19) a. もうちょっとで荷物が棚から落ちるところだった。  
b. ??もうちょっとで荷物が棚から落ちるところだ。  
c. \*もうちょっとで空が曇るところだった。  
d. もうちょっとで空が曇るところだ。

意味と概念の流れのプロセスから(17) bを眺めると、事柄の認知、動き、動きの内容、動詞の語彙選択、そして、アスペクトの意味の認知、「もうちょっとで」の意味認知、「もうちょっとで」の意味認知とアスペクト性の意味認知との関連、動詞の形態選択のための動詞の意味素性の認知、そして全体の意味と個別の意味との関連の認知、など(17)の1、2、3、4が相互に移動しながら、意味の調整を行っている。

構造の流れからみていくと、動詞の決定、動詞と項の結合、アスペクトの形態、動詞とアスペクトの連接形態、「もうちょっとで」とアスペクトの形式、全体の統語調整というようにそれぞれの内的な構造分析が部分と全体とが相互に関係しあい、また、意味の流れと共に、(17)の1、2、3、4が相互に移動しながら決定されていくと考えられる。意味と概念の流れと構造の流れはそれぞれ、全てのメンタルな動きの単位を活性化し合いながら認知し、文を産出していくものと考えられる。

この両者の相互交渉は左から右へと流れる文(上のように左から右へと文を記述する場合)の音声形式化して、連続的に語意を選択し形成するシリアルタイプではなく、左から右に右から左に更に左から右にといった相互の活性を利用したマルチプルタイプの相互活性タイプ(Dell, 1986)の認知プロセスがなされているといえる。このことは括弧で囲われた部分と次の括弧部分では制約が起りえると同時に躊躇性があらわれることを予測させてくれる。(9)、(10)、(11)、(12)、(13)、(14)の例を見ると、「ようとしている」か「ところだ」のどちらを用いようとしているのかわからないが、共通した点が見受けられる。まずはじめに、「もうちょっとで」のあとにポーズがおかれていることである。これは事柄の中心的意味役割をする動詞の意味と事柄の状況からのアスペクト認知とその連結、そして構造的な調整が同時に行われているとすると、次の発話のプランニングとしてのプロセスと見ることができる。(15)イ、ウのように動詞の語幹のあとポーズがおこり、その語幹を繰り返しているのは、語の決定とその語と項のとり方の統語配列のプランニング、又、同時に動詞とアスペクトの意味の結合と形態の調整およびアスペクト形式の選択調整と考えられる。ここでは核の層とそれに続く各々の層の意味と形式との結びつき、いわば、(17)の1、2、3が調整される場所とみることができる。つまり、ここでの、(15)ウ、エはそのプランニング過程にあるからと考えられる。また、(15)のオは「もうちょっとで」とアスペクトの意味が認知されるにもかかわらず、調整の複雑さから、アスペクト形式を無視した形になっている。これは、「しちやった」の形式の親近性(familiarity)に引きずられ、アスペクト形式よりも優先されてしまったからと思われる。又、(15)カにおいては、動詞の語幹のあと、ポーズが置かれ、誤った形で「タ」が選択されている。これはアスペクト形式の検索調整か、一旦「タ」まで認知され、動詞の語幹まで発話された後に、誤りを認知したのかもしれない。

構造上、核の層以前に置かれた「もうちょっとで」は、アスペクトの意味の「一ようとしている」を言語形式化する前に認知しながら、「もうちょっとで」を発しているとみることができる。このことはかならずしも意味の認知が言語形式に直接むすびつくのではなく一旦プールされ、先取りされたかっこうで、記憶に入れられてから、核の層内の意味と構造とアスペクト意味の関係を認知する。次に、その関係を維持しながら、さらに「もうちょっとで」の発話の際に認知の相互活性化している間に、躊躇が現われるとみることができる。このことは、Bock(1995)、Garret(1990)においても統語的なスキーマを描きながら、語彙のアクセスをスロットさせ、意味と語のフォームを整えて文を生成していく方法に似ている。しかしこの「もうちょっとで」が使用される場合、アスペクトの意味とその形式から統語的な構造が構成されていく方法は、語彙と統語論を記憶のなかに一旦入れて、ハイアラキカルな構造に組み換えながら、機能的に文を構成する方法とは違うように思われる。

以上の点から、「もうちょっとで」に係るアスペクト形式「-yoo (-oo)としている」は発話上、より複雑な過程をとることがわかる。それぞれの意味と形式の結合は実際の発話の躊躇性アからかまでの現象と(17)bの括弧1、2、3の連接過程の上であらわれうる躊躇性を説明できる。(17)bの括弧1、2、3、のつながりの調整不備によって誤用がでてくるものと考えられる。しかしながら、これは「一ところだ」形式の単純な形式を利用する手だてがあるにもかかわらず、それをも使用されていない事実を説明することができない。これを説明するために「ところだ」形式をみていく。

## 6-2 「ところだ」形式の場合

「ところ」は被修飾成分として名詞句を形成する。寺村は「修飾部が結び付いてのみ、その特殊な意味が発揮される」(p210)として「どういふアスペクト段階にあるかということ話し手が言おうとする心理的に出る表現でムードの形式と考えられる。」として形式的な側面を重視している。そして、形づけられた後の意味機能とを総合的に見ているといつてよい。しかしながら、文産出のプロセスからみると、意味と形式の結合段階をさらに深く検討していく必要がある。「ところ」が語彙として選択され、修飾部と結合するという形式的プロセスの後、意味機能が付与されるという見方は構造を優先する場合である。もう一つは、意味が優先し語彙を選択してから、統語形式を整えていくというプロセスの流れである。

名詞の構造を優先させる場合、この「ところ」は被修飾語となって名詞文を構成する。つまり、修飾句内の構造のあとに「ところ」が直接接続する。その後、判定詞の「だ」が述語機能をしている。形式名詞といわれるのは「ところ」自体に意味があるのではなく、動詞に付加されてはじめて意味があらわれることになるからである。この場合、修飾句の核文に「ところ」が、文全体の意味構造に優先して下接し、構図の部分を作り上げてから、意味機能が構文上に発揮されるという見方である。

一方、アスペクトの意味が優先する場合、事柄の状況をアスペクト的な観点に視点をおきながら、とらえるので、意味の構図つまり、事柄内容とそれに対する話者の認識的な態度というモダリティーの意味とがメッセージレベルでの概略的な語彙選択と概略的な句構造の枠組みを決定し、内的に列挙されるといってよい。この意味上の概略的な構図から確定的な語彙選択と調整が行われる。このことは、事態を言語として記号化する際、構造よりも意味が優先される (Gleitman1995) わけで、構造から意味が確定されるとすると、文産出の基本から逸脱する。しかしながら、この形式的な名詞は意味と形式が整った語彙としてメッセージレベルに収まっていない可能性があるので、(15) イ、オ、カのようなポーズが現われるのではないかと考えられる。

一見構造的な見方で「ところだ」を名詞として扱う場合、核文が「ところだ」を修飾するとすると、この形式は単純にみえる。しかし、メッセージレベルでの語彙選択の際、形式名詞はそれ自体意味を担っていないので、そこでは選択して列挙されるわけにはいかない。つまり、ファンクショナルレベルで、それも統語調整のポジショナルレベルに近い段階で、この語彙の選択がなされなければならないからである。すると、語彙形式と統語機能と意味の三つの点がこの段階で調整されてからメッセージレベルで行われる基本的な意味の語彙選択が発話可能な直前のポジショナルレベルで行われることになる。そうすると、ポジショナルレベルからメッセージレベルの認知にもう一回もどる必要があるので、Garretのモデルの説明では一貫性を欠くことになる。というのは、一方向の流れから逆行するからである。また、この逆行は当然制約を作り出すことになる。つまり、(15) のイ、オ、カのようなポーズとして現われることになる。

この構造的な流れと意味概念の流れからくる両者の矛盾を克服できるのは、相互に意味、形式とメッセージレベルとファンクショナルレベル、とポジショナルレベルが相互に活性化されながら増加的に文が生成される (Stemberger, 1985) と見る必要がでてくるわけである。つまり、句構造から順にと統語調整が行われるというのではないことは (Frazier, 1987) が示している通りである。このことは、(20) の1、2、3、4、5のそれぞれの調整の段階で意味と語彙選択、意味と語彙形式の調整、統語関係と語彙形式の調整というように1、2、3、4、5の順に認知がなされているのではないということである。相互に意味、語彙、形式、統語、また、統語から、形式そして意味そして統語調整というように、認知のプロセスがおこなわれるはずである。

- (20) a. もうちょっとで犬が兎を食べるよ。  
b. もうちょっとで犬が兎を食べるところだった。  
c. [5[4[3もうちょっとで[2[1犬が兎を食べる]2]ところ]3]だ]4]った]5]。

このような「ところだ」形式が「もうちょっとで」で焦点が当てられたとき、一貫したポーズが現われるのはこれまで述べてきた文産出のプロセスが原因となっている。

又、そのほかに、意味の規制が現われる。(19) a, bのように動詞によっては、現在の状況を描写するのに使用できないが、過去の場合は使用できる場合があるなどの制約がおこる。例えば、「こぼれる、ぶつかる、パンクする、落ちる」などの動詞では、不意に起こりうる動詞類で、結果的に期待されない状況の意味を含意している。これらの類は動詞の後に「ところだ」はつきにくく、「ところだった」であれば、可能である。この場合、過去の将来態以外に事柄の不生起によって安心感が伴うというムードが出てくる。これら動詞の意味素性と関係も文産出上の制約の一つである。

### 6-3 「ところだ」形式と「ようとしている」形式の対比

これまで述べてきた「もうちょっとで」がとるアスペクト形式の「ところだ」形式及び「ようとしている」形式の比較を表に示すと次のようになる。

表1

「ようとしている」		
動詞のタイプ	動詞の意思／非意思	形式
活用タイプの選択	意思のみ	V-yoo/-oo+と+していー
-ooタイプ / -yooタイプ	非意思性の動詞は他のモダリティー形式	

「ところだ」		
動詞のタイプ	動詞の意思／非意思	形式
活用タイプの選択	意思のみ	
必要なし	非意思性の動詞は他のモダリティー形式 または、「ところだった」のみ	-Vル (-タ) ところ

この表をみると明らかに、「ところだ」形式の方が、単純である。動詞の活用タイプを区別する必要もなければ、形式においても「ようとしている」形式と違って動詞の過去か非過去かの形態と「ところ」を利用するだけである。しかし、「ところだ」においては、「もうちょっとで」とアスペクトの意味が全面に押し出されて、意味と全体の形式が優先するプロセスと、「ところだ」が修飾文に直接付加される形式的なプロセスの二通りあることを述べた。しかし、意味と形式と語彙および統語の相互活性化により、形式的な名詞を処理するのに、「ようとしている」とは違った次元のプロセスを通る可能性がある。この制約が現われる。そのため、話者はその特異性に適応できないか、もしくは「ようとしている」タイプと競合している時にかなり長いポーズや、繰り返しがあらわれ、誤用を犯してしまうものと思われる。

## 7. 表出性の喪失とプロセスへの影響

(20) aを過去にすると、(20) bの様になるはずである。このことによって、前述したように眼前に生起する出来事の話者の驚きのような感情の表出性は「ところだ」および、「ようとしている」を使用することによって消失する。この表出性の欠如は仁田(1989)、増岡(1991)によって話者の事柄に対する述べ立てのモダリティーとして扱われることにもなる。この表出性の欠如は「ようとしている」形式と同じく文を産出する上で、躊躇性を説明するのに重要な役割を果たす可能性がある。たとえば、次の第一言語日本語の中学一年生と中学二年生のバイリンガルの子供の誤用の例を見られたい。

- (21) a. さっきね..、猫がね..、もうちょっとで...魚を.... た..とった..とる..ところだったよ。  
 b. さっきね、ん/n/....、もうちょっとで/e/....ちやった..あれ...、とった..とっ..ちやった。

この例は、猫が店の魚をとろうとしている様子を絵で見せながら、『ほら、ねこが魚をとるよ。』と言った後で、その店の店員に報告させるという設定で話させたものである。『さっきね、猫がね、もうちょっとで』というところまで誘導して、その後を被験者に完成させるという方法である。この二例は過去を表わす一タが動詞の語頭の音よりも出されている。これはあくまでも過去の標識を先に発している。これは事柄の話者の直接的な驚きを持った表出の意味素性の喪失と過去の出来事とをあまりにも意識しすぎたからなのかもしれない。Pinker (1987)、Slobin (1984) では時制の標識は他の形態素よりも優先的に認知され獲得されるとしているので、一旦認知されていれば、プロセスは容易なはずである。仮にそうだとすれば、一タのあとにはあまり長いポーズは置かれないのではないかとということである。一見一タはそれ以前のアスペクト形式に接続するので、制約が現われると思われがちであるが、一タが分離され、発話されているのは、その一タの前後の意味と形式に影響されているからにはかならない。つまり、先の表出性の欠如が影響しているのではないかと考えることもできる。更に、形態の複雑性というのであれば、語彙の語頭の音が先にだされているのではないと思われる。つまり、この一タの出現と躊躇性を説明するには過去の出来事を報告文にすることで、表出性が喪失するからではないかと思われる。

## 8. 終わりに

本稿では、話者と聞き手の眼前の出来事の生起の直前に焦点を当てる「もうちょっとで」を使用し、過去の出来事の報告にすると、どのような現象があるかをアスペクトとの関係からみてきた。特にバイリンガル子弟の誤用をGarretの躊躇性のモデルを利用して分析しながら、「もうちょっとで」が使用される過去の報告はどのような文産出のプロセスをとるのかさぐってみた。ここでは日本語の特徴である呼応のような形式、および、形式名詞を利用したアスペクトの意味との関係、また、動詞に続く複雑な形式の文産出の過程をみてきた。この「もうちょっとで」が使用される文の生成の過程は、概念的な意味把握と語彙選択、語彙の形式の調整、統語レベルでの意味と構造の調整などある順を追って構成されていくのではなく、複雑に意味と形式、構造が相互に活性化しあいながら認知され形成されることを述べた。また、とくに動詞の現在形をアスペクト形式として利用する文を過去の報告文にすると、事柄に対する話者の直接的表出表現の意味素性が欠落し、おおきな制約の一つになることを提示することができた。

以上のことより、事態の寸前にある状態を現す場合、過去の出来事と現在の眼前の状態とではかなりの相違があり、バイリンガル子弟のように報告に関する発話状況が不備な環境にある場合は、言語発達がおくれるか、化石化 (Fossilization) してしまう可能性を持っている。

## 参考文献

- 金水敏(1989)「報告についての覚書」『日本語のモダリティー』くろしお出版 121-129  
 金田一春彦(1976)「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 27-61  
 金田一春彦(1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、  
 工藤浩(1982)、「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院176-198.  
 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能」『研究所報告集3』国立国語研究所  
 工藤真由美(1986)「アスペクトについてのおぼえがき」『日本語動詞のすべて』『国文学解釈と鑑賞』  
 至文堂

- 工藤真由美(1996)『アスペクト、テンス、体系とテキスト』ひつじ書房 61-163
- 国立国語研究所(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 澤田治美(1993)『視点と主観性』ひつじ書房
- 寺村秀夫(1981)『日本語のシンタクスと意味 1』くろしお出版 139-154.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 2』くろしお出版 81-216, 290--292.
- 仁田義雄(1983)「動詞に係る副詞修飾成分の諸相」『日本語学』Vol.2-10.明治書院
- 仁田義雄(1989a)「拡大語彙論的統語論」『日本語学の新展開』くろしお出版 45-77
- 仁田義雄(1989b)「述べて立てのモダリティーと人称」『阪大日本語研究 1』大阪大学文学部日本学科(言語系) 31-62.
- 松下大三郎(1926)『標準日本文法』紀元社
- 増岡隆志(1991)『日本語のモダリティー』くろしお出版
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究明治書院』138-180.
- 渡辺実(1981)『国語構文論』埴書房
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房 101-117.
- Bock, kathryn. (1995).Sentence Production: From Mind to Mouth. Speech, Language, and Communication. Academic Press. 81-216.
- Dell, S. Gary & O'Seaghdha. Pdraig.(1992). Stage of Lexical Access in Language Production. Cognition.42. 287-314.
- Dell, S. Gary (1986) A spreading activation theory of retrieval in sentence production. Psychological Review 93. 283-321
- Garret, Merrill. F. (1982). Production of the Speech: Observations from Normal and Pathological Language. Normality and Pathology in Cognitive Function.
- Garret, Merrill. F. (1982). A perspective On Research in Language Production. Perspectives On Mental Representation. Lawrence Erlbaum Associates.185-199.
- Garret, Merrill. F. (1990) Sentence Processing. Language. An Invitation to Cognitive Science. MIT.
- Garret, Merrill. F.(1992). Disorder of Lexical Selection. Cognition, 42. 143-180.
- Gleitman, Lilia. (1993). The Structural Sources of Verb Meaning. Language Acquisition. 174-223.
- Frazier, Lynn.(1987).Sentence Processing: A tutorial review. Attention and Performance 7 LawrenceErlbaum Association. 559-586.
- Kilbourn, Kathryn(1993). On line integration of Grammatical Information in Second Language. Cognitive Process Bilinguals. Amsterdam, North Holland.
- Pinker, Steven.(1987). Language Learnability and Language Development. 243-290
- Rayner, K. Carlson, M. and Frazier, L.(1983).The interaction of syntax and semantics during sentence processing: Eye Movements in the Analysis of Semantically Based Sentences. Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior. 22, 358-374.
- Slobin, D. I. Crosslinguistics evidence forfor the language making capacity.The Crosslinguistics study of study of acquisition.Erbaum Association.
- Stemberger, J. Paul. & MacWhinney. (1986). Form-Oriented Inflectional errors in Language Processing. 329-354.
- Stemberger, J. Paul. (1985). An interactive activation model of language production. Progress in the Psychology of Language Vol.1. Eribaum 143-186.